

「イサクの嫁取り物語」

2021年02月17日

アブラハムは、財産のすべてを管理している家の老僕に言った、「私の腿の下に手を入れ、天の神、地の神である主にかけて誓いなさい。私が住んでいるカナンの娘たちの中から、息子の妻を迎えてはならない。私の生まれた地、私の親族のところに行って、息子イサクのために妻を迎えなさい。」(創世記 24 章 2 節～4 節)

24 章は創世記の中で、67 節からなる最も長い章で、アブラハムの独り子イサクの嫁取り物語が牧歌的に描かれている。読む者を心温まる思いにさせる。

イサクは両親の深い愛情を受け、温和な青年に成長した。アブラハムは多くの日を重ねて年を取ったが、全てにおいて、祝福された。アブラハムは、イサクに妻を取る年頃になったと、イサクの嫁取りの支度をした。家の全ての財産を管理させていた忠実な老僕を呼び、「私の腿の下に手を入れ、天の神、地の神である主にかけて誓いなさい。私が住んでいるカナンの娘たちの中から、息子の妻を迎えてはならない。私の生まれた地、私の親族のところに行って、息子イサクのために妻を迎えなさい」と言った。「腿の下」とは、性器のことで、神との契約の印である割礼を受けた性器に触れることによって神聖な誓約儀礼が成立する。米国の大統領就任式の時、聖書に手を置いて誓うのと同じである。アブラハムは、利害にさといカナン人の娘ではなく、神への信仰を持つ故郷の人の娘の中から、イサクの妻を迎えよと言っている。イサクの妻となる唯一つの条件であった。僕は、その女の人がカナンの地に来るのを望まない場合、イサクをアブラハムの出身地に連れて行かなければならないでしょうかと問うた。アブラハムは答えている。イサクを向こうへ連れて行ってはならない。神は「あなたの子孫にこの地を与える」と言われたので、故郷からこちらにイサクの妻を迎えることができる。もし、あなたに付いて来ることを望まないなら、あなたと私の誓いは解かれる。息子イサクを向こうに連れて行くことは、断じてしてならない、と。僕はアブラハムの腿の下に手を入れて誓った。

僕は主人のらくだ 10 頭を選び、主人からの贈り物である貴重な品々を携えて出かけた。アブラハムは紀元前 20 世紀頃の人で、この時代、らくだはまだ家畜化していなかった。著者は、らくだ 10 頭と書いて、イサクの嫁取りを大仰な出来事として伝えている。行く先はアブラハムの故郷ナハム・ナハライのナホルの町である。ナハム・ナハライはアブラハムが旅立ったハランの東の地域で、そこにナホルの町があるのであろう。カナンから、ゆうに 600 km はある大旅行である。目指す町に日暮れ時、ようやく辿り着き、水を汲みに女たちがやってくる頃、井戸の傍でらくだを休ませた。僕は、アブラハムから教えられた信仰に倣い、主人アブラハムに慈しみをお示しくださいと、次のように祈った。水を汲みにきた娘たちに「水がめを傾けて、水を飲ませてください」と言った時、「お飲みください。らくだにも飲ませてあげましょう」と答える娘がいれば、彼女こそ、主がイサクのために定められた妻としてください。そうすれば、あなたが主人に慈しみを示されたと分かるでしょう、と。旅人を親切にもてなすことが、信仰を持つ者の愛の証である。僕が祈り終わらない内に、リベカが水がめを肩に載せてやって来た。彼女が極めて美しく、男を知らない処女であった。彼女は泉に下りて、水がめに水を満たし上がって来た。僕は彼女に駆け寄り、「どうか、水がめの水を少しばかり飲ませてください。」と頼んだ。彼女は「どうぞお飲みください、ご主人」と言って、水がめを下ろし、手に抱え、彼に飲ませた。